

## スポーツにおける社会的インパクト評価の枠組み

イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校 応用健康科学部 教授  
井上 雄平

### はじめに

私は現在、アメリカのイリノイ大学にてスポーツマネジメント領域の教授を務めている。スポーツの社会的インパクトの評価や、スポーツイベントやプログラムをどのようにマネジメントすれば社会的インパクトをより向上できるのかということを経験に研究を行っている。

### スポーツの社会的インパクトの定義

まず、スポーツの社会的インパクトとは何かを定義していきたい。スポーツの社会的インパクトとは、スポーツイベントやプログラムが、ステークホルダーのウェルビーイングの側面に与える影響と定義できる。ステークホルダーとは、参加者やボランティアなどスポーツ活動の影響を受ける全ての人々と理解できる。したがって、社会的インパクトの評価は、スポーツを行うことによって、様々なステークホルダーがウェルビーイングに関してどのような影響を受けるのかを理解・評価するということである。

次に、日本でも浸透してきているウェルビーイングとはそもそもどのようなものなのかを説明したい。ウェルビーイングは WHO による概念化に基づき、3つに分けることができる。

第1に、身体的ウェルビーイングである。これは身体的な健康であるが、健康を保てるだけの知識や能力を有しているかどうかといったものも含まれる。

第2に、精神的ウェルビーイングである。これはさらに、主観

的ウェルビーイングと心理的ウェルビーイングに分けることができるが、主観的ウェルビーイングには、自身の人生に満足しているか、幸せを感じているか、心理的ウェルビーイングには、自分が成長できているのか、人生に生きがいを感じるかといったものが含まれる。

第3に、社会的ウェルビーイングである。ここには、信頼できる社会関係を持っているか、コミュニティへの帰属意識、自分の地域や様々なグループへの帰属意識があるのかといったものが含まれる。

したがって、スポーツの社会的インパクトといったときには、スポーツイベントやプログラムがそれぞれのステークホルダーの身体的・精神的・社会的なウェルビーイングにどのような影響を与えるのかを理解していくことになる。

## 社会的インパクトを評価する意義と国際傾向

では、そもそもなぜ社会的インパクトの評価が必要なのか。さらには、世界的にどのような傾向があるのかを説明したい。

社会的インパクトの評価は最近10年ほどで非常に活発になってきており、経済的インパクトに代わる新しい評価の指標として台頭してきている。

最近の調査によると、例えばオリンピックのような大規模スポーツイベントでの社会的インパクトの評価、さらには、小規模や中規模イベント、地域の大会といったものでも社会的インパクトの評価が行われている。このような社会的インパクトの評価の増加に伴い、様々な評価方法が出てきているが、どのように測定したのかが統一されていなかった。そこで、OECDのような国際組織により、統一指標を開発する取組みが活発化してきている。

それに加えて、社会的インパクトはなかなか価値として測定しづらいが、それを金銭換算する手法への注目も高まっている。具体例

としては、SROI（社会的投資収益率）が挙げられる。これは、社会的インパクトを金銭換算価値に変換し、その総額を、社会的インパクトを創出するのに必要だったコストの総額で割っていく。金銭価値として考えたときに、費用対効果としてそれぞれの活動がどれだけ社会的インパクトをステークホルダーに与えたのかを評価する手法であり、注目されてきている。

では、なぜ社会的インパクトを評価すべきなのか。まずは、スポーツへの投資の重要性の根拠を示すことが必要になってきている点が挙げられる。スポーツには様々な価値があると思うが、見えにくい価値もある。そうした価値をしっかりと可視化してエビデンスを示すことによって、ステークホルダーや資金提供を行う政府、自治体、国民、企業等に説明責任を果たすという観点から、社会的インパクトが必要になってきている。

さらに、社会的インパクトの評価・測定をしない限り、管理・マネジメントができないという考えがある。社会的インパクトの調査を行い、実際に影響を見ていくことによって、より効率良く影響を与えるためにはどのようなマネジメントや管理が必要なのかという視点が形成される。そうした点からも、社会的インパクトを評価することが重要になってくる。

## スポーツにおける社会的インパクトの評価枠組み

次に、スポーツにおける社会的インパクトの評価の枠組みの一例を紹介したい。この枠組みは、先ほどのウェルビーイングの側面に関連して、スポーツの社会的価値やインパクトを5つに分けたものである。2013年にアメリカのミシガン大学の研究者によって発表された。第1に、ヘルスリテラシーである。スポーツイベントやプログラムを通して、健康維持に役立つような正しい情報・知識・能力を人々が身につけていくという社会的インパクトである。

第2に、主観的ウェルビーイングである。これは、スポーツを通して人生の満足や幸福度、幸せに感じることを増やすことを指す。

第3に、人的資本である。これは心理的ウェルビーイングの考えに近い。スポーツイベントやプログラムが、参加者または観戦者の自己成長の機会につながっていくというものである。

第4は、社会関係資本、第5は、集団的アイデンティティであり、この2点は、社会的ウェルビーイングの概念に近い。スポーツが、信頼できる社会関係やネットワークの構築につながることに加え、集団的アイデンティティを形成し、コミュニティへの帰属意識が強まる。こういったものを、スポーツの社会的インパクトの評価の枠組みとして見ることができる。

## カンボジアにおける調査の概要

この枠組みを応用したものとして、私がカンボジアのアンコールワット国際ハーフマラソン大会の社会的インパクトの評価を目的として行った調査を説明したい。

同大会には、スポーツ大会としての機能に加えて、現地の地雷被害者等への支援を行うチャリティースポーツイベントの側面もあり、大会を通して社会課題を解決することも、大会の一側面として挙げられる。

本調査では、少し古くなってしまいが、2015年大会を対象に地元住民への聞き取りとサーベイ調査を実施した。先ほど説明した社会的インパクト評価の枠組みに基づいて調査を設計した。

## 評価プロセスと調査結果

まず、評価のプロセスについて、先ほど説明した枠組みに基づいて、大会の社会的インパクトを暫定的に5つに定義した。それに基づいてインタビューの質問項目を開発し、イベント開催の半年前

に計 37 人の地元住民に聞き取り調査を行い、実際にこの 5 つの枠組みが本当に当てはまるかどうかを分析した。その後、同大会により関連があるインパクトのタイプを選定して、今度はサーベイによる質問項目を作成し、実際に住民に評価をしていただくというプロセスであった。

聞き取り調査の結果として、先ほどは 5 つのインパクトを説明したが、実際に聞き取り調査を行うことによって、社会的インパクトは 3 つのタイプに分けられることが分かった。第 1 のタイプは、健康と主観的ウェルビーイングの向上である。インタビューでは、大会に参加することでどれだけマラソンが健康にとって重要であるかを学ぶ機会につながった、楽しみながらそうしたことが理解できる、地域におけるスポーツの普及や健康の促進にもつながるといった意見が得られた。

さらに、第 2 のタイプとして、社会関係資本、すなわち、大会を通して人と人とが助け合ったり、関係を深めたりする機会につながるという意見が得られた。

最後に、第 3 のタイプとして、集団的アイデンティティの形成、すなわち、参加者を実際に応援することによって、自分がクメール人として生まれたことへの誇りや、アンコールワットという地域の象徴があり、それを参加者がマラソン中に実際に見ることができることに誇りを感じるという意見も得られた。

次に、この 3 つのタイプの社会的インパクトに関して、実際にどれだけ地元住民が経験しているのかどうかの分析を、サーベイ調査を基に行った。7 段階の評価を行ったが、3 つのタイプすべてで、6.0 またはそれに近い値が示された。これによって、社会的インパクトに関して地域住民が肯定的に捉えていることが分かった。他にも様々な分析を行ったが、例えば、大会に出場したか否かは社会的インパクトの実際の値には影響しないということが明らかになっ

た。すなわち、直接的に参加するだけでなく観戦者として観る中でも、社会的インパクトを経験するということが分かった。

また、先ほど説明したように、この大会にはチャリティーイベントとしての機能もあるが、チャリティーの機能に関して高い評価をする場合、大会の社会的インパクトの評価も高まるということが分かった。したがって、スポーツイベントを通して社会課題を解決していくことで、社会的インパクトの評価も上がっていくということが言えると思う。

### 事例研究に基づく考察と提言

事例研究からの考察と提言だが、まず、評価する活動の特徴に沿って社会的インパクトのタイプを定義することが重要である。私の調査では、当初は枠組みを5つに分け、本当にその枠組みに当てはまるのかどうかを事例研究に基づいて調査してきた。その後、ステークホルダーの意見を聞いて精査・変更し、それに基づいてサーベイ等を実施して、実際に経験したのか否かの評価を行った。

さらに重要なのは、ここで紹介した枠組みはスポーツのポジティブな面しか考慮に入れていないというリミテーションがある点である。将来の研究や、現在私が行っている研究では、スポーツの負のインパクトも考慮に入れることが重要であると考えている。例えば、スポーツに参加すると、怪我のリスク等が増えることになる。ただ単に正のインパクトを評価するだけではなく、負のインパクトを評価し、その中で正のインパクトをどれだけ上げるのか、負のインパクトをどれだけ削減するのかというマネジメントの視点が必要だと考える。また、私が行ったように、質的なエビデンスと量的なエビデンスの両方を収集することで、多角的にスポーツイベントやスポーツプログラムのインパクトの評価を行うことが重要だと考える。

具体的には、聞き取りを行い、どのようなインパクトがあったのかについて、ステークホルダーの経験に対する理解を進める。さらに、量的なエビデンスとしてサーベイによる定量的な評価や二次データの分析を行うことによって、例えば医療費をどれだけ削減したのか、運動実施率がどれだけ増えたのかを明らかにし、さらには、先ほども紹介したように、SROIによるインパクトの金銭換算価値を示す。そうしたことが重要になっていくと思う。

## 総括

この発表では、スポーツの社会的インパクトを、スポーツ活動がステークホルダーのウェルビーイングの側面に与える影響と定義した。その定義を応用したものとして、スポーツの社会的インパクトの枠組みを説明したが、これは社会的インパクトをヘルスリテラシー、主観的ウェルビーイング、自己成長、社会関係資本、集団的アイデンティティの5つに分けるものである。最後に、私がこうした枠組みを通して調査を行った中での提言としては、この枠組みは出発点としては良いと思うが、さらにステークホルダーからの意見を取り入れていく中で、評価する活動の特徴に沿ったインパクトのタイプを定義し、それを基に実際に測定することが重要である。

## 質疑応答

Q. 2つ質問。1点目に、社会的インパクトを評価するタイミングは、イベントの最中のほうが良いのか。それとも、数年後にインパクトが変わることを考慮して事後でも構わないのか。

もう1点は、ウェルビーイングについて、私の理解では、ウェルビーイングは個人レベルでも社会レベルでも、色々な組織や場所で使える・論じられる概念だと思っている。今回の発表では個人のウェルビーイングを指標として使われていたが、地域の変化や地域

のウェルビーイングとの関連性をどのように考えているのか。

○井上氏 まず、調査のタイミングについて、調査では、単に1回の評価を行うよりも、イベントの直後と、それに加えて、例えば半年後や1年後、2年後等、社会的インパクトが持続的に起きているかどうかを示すことも重要だと思う。

よって、理想としては、まずはスポーツ活動や評価するイベント・プログラムが行われる前に、まず現状としてはどうなのかの調査を行い、さらに、イベント中、イベント直後に計測していき、そのインパクトは実際にイベントがあったことによって増えたのか、減ったのか、さらにどれだけ継続していたのかに関する調査を持続的に行っていくことが挙げられると思う。

2点目の、個人に対するインパクトと地域に対するインパクトは、非常に重要な点だと思う。社会的インパクト評価の1つの考えとして、実際に経験した人から評価することが重要になる。もちろん地域によって様々なインパクトが地域レベルで起きていくことはあると思うが、地域レベルでのインパクトの影響を最終的には誰が受けたのか、地域でどのような変化が起きて、そのために地元住民や参加者の何が変わっていったのかという評価は、経験した個人レベルでしかできないと思う。

そういった意味で、もちろん様々な人が影響を受ければ地域全体にも影響が広がっていくと思うが、その評価をする際には、経験した人、変化を受けた人から影響を見ていくことが重要だと考える。

**Q.** 規模の小さなものや予算がないようなイベントをどのように評価していけば良いのか。

○井上氏 きわめて重要な点である。評価は非常に重要だが、予算がない中でどれだけ評価を行うのかということになると思う。理想としては、先ほど紹介した研究でも行ったように、まずはどのよう

な変化が起きたのかに関する聞き取りを通して、インパクトのタイプを理解し、さらに、量的な変化が実際にあったのかどうかを把握することが挙げられる。

理想は包括的な評価を行うことだが、完璧なものを求めて評価をしないよりは、不完全なものでも、評価をする中でエビデンスを集めることが重要であると考ええる。

**Q.** 政策評価では、アウトカムやアウトプット、もしくはIOCではレガシーと表現されているが、インパクト等のような用語の定義や、使い分けはあるのか。

○井上氏 使い分けている。例えば、「アウトプット」というのは、活動を数量的に表すものになる。したがって、例えばスポーツイベントを行ったことによって影響があった場合に、イベントに関連して様々なプログラムを行うとすれば、「1万人がスポーツイベントに関するプログラムに参加した」という事実がアウトプットである。「アウトカム」というのは、当該スポーツイベントに関するプログラムに参加したことによって、参加者に実際にどのような影響があったのかを指す。例えば、1万人が同プログラムに参加したことにより、1人1人が健康に気を遣うようになったという影響は、アウトカムである。さらに、先述したウェルビーイングの側面に対する影響である「インパクト」というのは、評価対象のプログラムとアウトカムの変化の因果関係によって示すことができる。

何かしらのスポーツイベントの後に人が幸せになったとする。だが、人が幸せになる理由には、収入の増加や人間関係の充実等、スポーツイベント以外の様々な要因がありうる。そのような他の要因を除いて、スポーツがアウトカムに影響を与えたという因果関係を示したときに、それをインパクトとして定義ができる。

Q. インパクトは、いわゆるアウトカムのように長期的なスパンでも確認することができるという理解でよいのか。

○井上氏 インパクトは長期的なものとしても確認できるが、ただ単に変化を示すだけでは足りず、当該活動との因果関係を示したときにインパクトになる。例えば因果関係は直後であれば示すことができると思うが、1年後になるとどんどん薄まってくる。よって、評価の時期や期間が長ければ長いほど、インパクトは下がっていくことになる。ただ、測定としては可能だと思う。

Q. その中で、行ったプログラムの良し悪し、すなわち、単にプログラムを実施した場合と、何かしらの工夫をした場合の違いは測定できるか。

○井上氏 それはインパクト・マネジメントの観点になると思うが、まず前提として、実際に変化が起きたか否か（インパクトが生じたか）という点が重要である。例えば、スポーツイベントやプログラムを継続的に実施した場合に、1年目のインパクトがあるかをまず評価できる。そして、もし2年目にイベント内容の変更や活動の増加といった工夫を行った場合には、その結果としてインパクトが増えたのか減ったのかを改めて評価できる。このようなマネジメントの評価は、継続的にインパクトを測定していることを前提として、その後に活動を変更した際のインパクトの増減を計測するという評価を行うことになると思う。

Q. 何年間も継続して評価をしていかなければ、その点（工夫によるインパクトの変化）については分からないということか。

○井上氏 そうなる。インパクトの評価をするということが、組織の文化、もしくは自治体の中のカルチャーとして根付いているということを経験として、このようなインパクト・マネジメントの評価

を行っていく。

Q. イベント間の比較はできないのか。例えば、種目間、マラソン大会のイベント、サッカーのイベント、もしくは規模や他の自治体との比較は可能か。

○井上氏 おおよそ同じようなアウトカムになると思われるので、それによって同じような指標を通して評価することが可能ではあると思う。ただ、地域やスポーツのタイプ等によってインパクトの具体的な内容が変わってくると思われるので、完全に比較するということはできないと思うが、同じような方法で評価することはできる。

また、先ほど SROI を説明したが、SROI の有意な点は、費用対効果の指標である。「これだけの投資をしたらこれだけの社会的インパクトが生まれた」という指標であるので、イベントの規模が異なっても相対評価できる。例えば、オリンピックの開催に 2 兆円必要であったが、4 兆円分のインパクトが生まれた一方で、小規模な大会で運営費は 100 万円だったが、300 万円分のインパクトが生まれたとすると、後者の小規模なイベントのほうが 3 倍分の社会的インパクトが生まれている一方で、オリンピックの場合は、予算は大きいけど 2 倍分しか生まれていない。そうすると、小規模なイベントを実施したほうが地域にとっては良いだろうといった相対的な評価はできるということになる。費用対効果の指標という意味では、SROI は今後注目を集めると考える。

Q. 社会的インパクトを定性的に捉える場合と定量的に捉える場合があり、定量化する際に最も分かりやすいのがインセンタムに置き換えることであるというお話が先ほどあったと思うが、お金の換算するとなると、いわゆる経済的インパクトと何が違うのか。社会的インパクトを金銭化した場合と、経済的インパクトを議論して

いる場合の違いをどのように説明すればよいか。

○井上氏 非常に重要な点だと考える。経済的なインパクトは、あくまで実際に収入が増えたかどうかの指標である。また、個人単位、または組織や地域単位で経済的により充実したかどうかという観点になる。一方で、社会的インパクトを金銭化する場合は、まず前提としてウェルビーイングが増えたのか、減ったのかを評価し、ウェルビーイングが増えていた場合には、金銭的に換算するとこれだけの価値になるというものを見ていく。よって、経済的なインパクトの評価の場合は、ウェルビーイングが増えたか、減ったかとは直接的には関係なく、研究でも分かっているように、単に収入が増えたからといって幸せにつながるわけではない。人間関係の充実や健康の維持のように、ウェルビーイングを増やす方法には様々なものがあると思うが、経済的インパクトは収入の変化に特化してしまう。他方で、社会的インパクトの金銭化は、より広い意味で、ウェルビーイングが増えたのか、減ったのかということを見ていった後に、そのウェルビーイングの金銭価値を変換して示すという点が、経済的インパクト評価との大きな違いである。